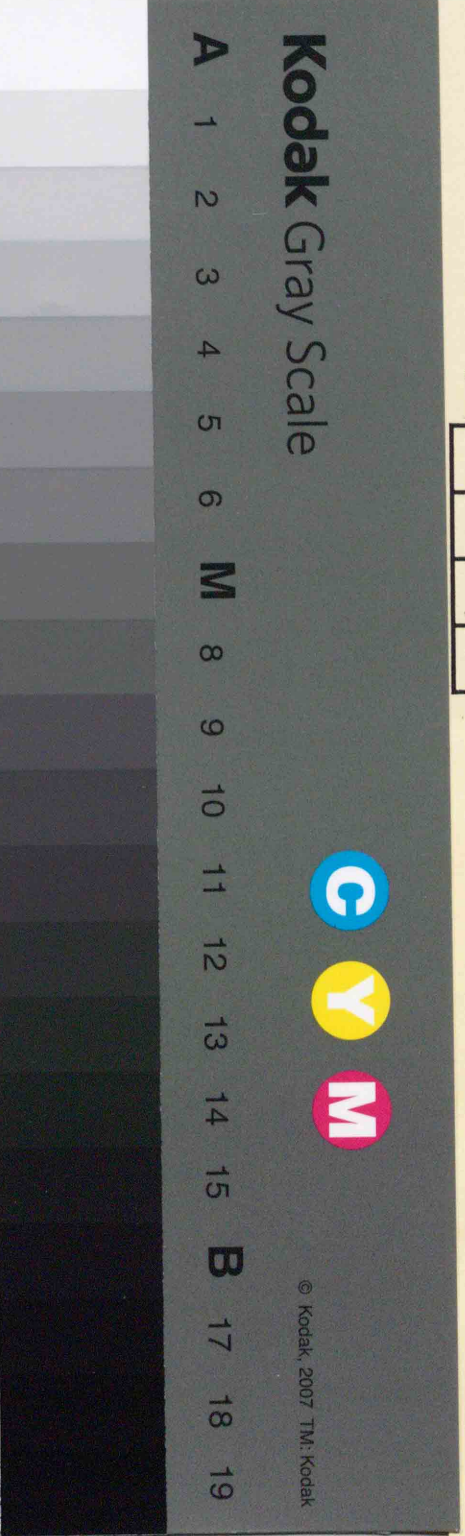
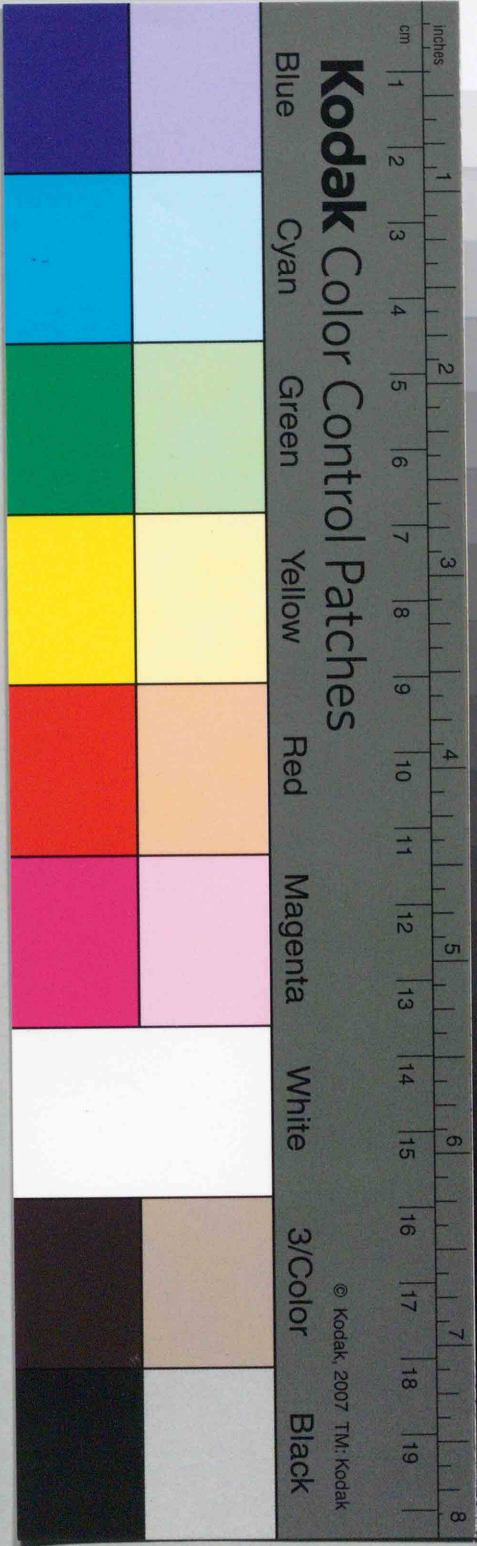
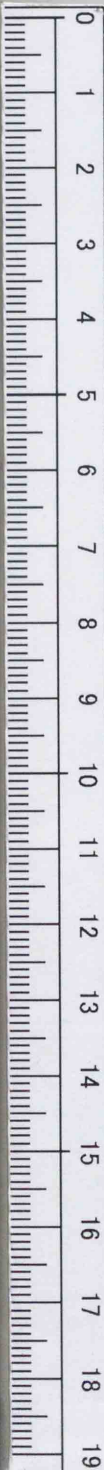




375.9
Grall
資料室



30519
教科書文庫
3
370
31-1894
20003
02893



資料室
中央圖書館

375
Ga

廣島大學
圖書印

廣島大學
教養部
圖書
NO.12748

院學習
初學教本六之卷目次

- 第十一課 神功皇后
- 第十二課 海軍
- 第十三課 旗
- 第十四課 村上義光
- 第十五課 村上義光
- 第十六課 美しき吾子
- 第十七課 馬

學習

初學教本

目次

一

學

習

第八課 牛

第九課 麥

第十課 困難ニカツベシ

第十一課 新井白石ノ話

第十二課 養生

第十三課 運動會

第十四課 親切

第十五課 童子の身を立てし話

第十六課 綾部道弘の話

第十七課 自立

第十八課 徳川常陸介

第十九課 事ハ勉強ニ在リ

第二十課 犬の話

第二十一課 一羽の鳥

第二十二課 義雄友を救ふ

第二十三課 荒木又右衛門

第廿四課 危キニ近ヨラス

第廿五課 龜松の話

第廿六課 黒田長政ノ話

第廿七課 難船を救ひし話

第廿八課 我國を愛すべし

第廿九課 我大君

院學習 初學教本六之卷目次終



院學習 初學教本六之卷

第一課 神功皇后

神功皇后ハ、仲哀天皇ノ皇后ナリ。御武勇

世ニスグレサセ給ヒテ、自三韓ヲ討チ

平ゲ給ヘリ。

初メ、筑紫ノクマソ背キテ、朝命ニ從ハザ

リシカバ、天皇筑紫ニ幸シテ、之ヲ討チ

給ヒシガ、行宮ニテ崩シ給ヘリ。

因リテ、皇后ハ、武内スクネ等ト、ハカリ給
ヒテ、カモワケト云ヘル者ヲシテ、クマ
ソヲ討タシメ給ヘリ。
皇后、更ニ、シラギノ國ヲ征伐セント思召
シ、丈夫ノヨソホヒヲナシ、諸軍ヲヒキ
井、船ニ召シテ進ミ給ヘリ。
此時、オヒ風ニテ、船ノ進ムコト速クシテ、
忽シラギノ國ニ着キ給ヒヌ。

シラギ王、我軍ノ
勢サカンナルヲ
見テ、大ニ恐レ、
一戦ヲモナサ
スシテ降参シ、
王子ヲ人質トシ、
今ヨリ後ハ、毎
年必ミツギ物



ヲ船八十艘ニツミテ、タテマツラント
チカヘリ。

カクテ、コマクダラノ二國ノ王モ、我が軍
ノ威勢ニオソレテ 降參シタリ。世ニ
神功皇后ノ三韓征伐ト云フハ、此事ナ
リ。

仲哀。韓。討。筑紫。崩。因。降。質。
艘。

第二課 海軍

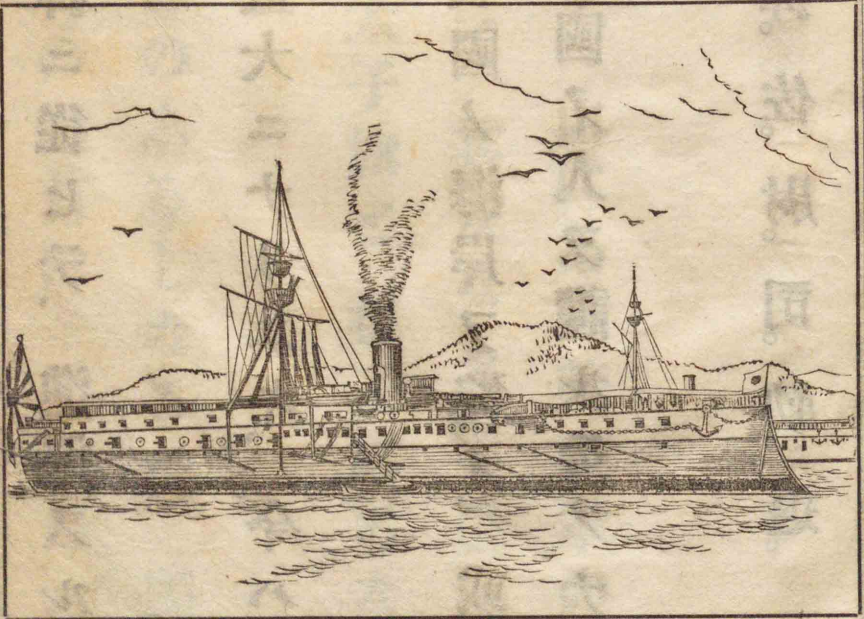
海軍ハ、海ニテ戰フモノナレバ、其兵士ハ、
必 船ニ乗ルコトニ ナレザル可ラス。
故ニ、水兵ニハ、海岸近ク住メル者ヲ用
フルナリ。

水兵ニエラバレタル者ハ、二十歳ニシテ、
軍ニ入り、四年ノ間、軍艦ニ乗リテ、種々
ノツトメヲ習フ。

軍艦ハ、其大小ニ從ヒテ、多クノ大砲ヲス
エツケ、水雷艇 其外種々ノ武器ヲ備ヘ、
乗り組ミ水兵ハ、數十人ヨリ 數百人ニ
至ル。

一ノ軍艦ヲ指揮スル者ヲ、艦長ト云フ。艦
長ハ、其軍艦ノ大小ニ由リテ、大佐少佐
大尉等アリ。
軍艦三艘以上ヲ組ミテ、艦隊ヲツクル。艦

隊ニハ、艦隊司令
長官アリテ、指揮
ヲナス。
司令長官ハ、大將 中
將 少將ノ中ヨリ
勤ムルナリ。
司令長官ノ乗レル船
ヲ、旗艦トイヒ、他



ノ軍艦ハ、皆其指揮ニ從ヒテ、進退スルモノナリ。

我國ノ海軍ハ、年々盛大ニナリユキ、今ハ數十艘ノ軍艦アリ。

是等ノ軍艦ハ、常ニ我國ノ海岸ヲ警メ、或ハ外國ニ赴キテ、我國ノ人ヲ護ルモノナリ。

乘。岸。艦。艇。指揮。佐。尉。司。勤。退。

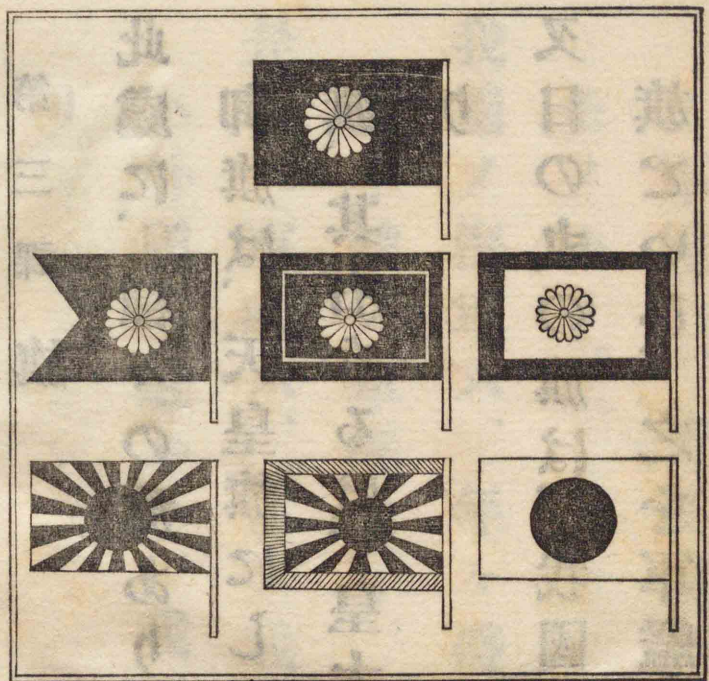
警。赴。護。

第三課 旗

此處に、種々の旗あり。上にある菊花章の御旗は、天皇旗にして、其左なるは、皇后旗、其右なるは、皇太子旗と親王旗となり。

又日の丸の旗は、我國のあるしなる故、國旗といひ、之を軍艦の艦首に掲ぐると

院
初學
六之卷
六
習
院



軍旗の左にあるを、軍艦旗とす。軍艦に掲

きは、艦首旗と云ふ。國旗の左なるを軍旗とす。軍旗は、陸軍にて、歩兵聯隊の用ふるものなり。

げて、我國海軍のあるしとするものなり。

是等の旗は、いづれも尊敬せざる可らず。

菊。丸。掲。聯。

第四課 村上義光一

後醍醐天皇ノ御代、世ノ中亂レテ、大塔宮吉野ニ落ち行キ給ヒケル時、賊兵道ヲサヘギリテ、進ムコト能ハズ。因リテ、宮ハ

初學
六之卷
六
習
院

近臣ヲツカハシテ、道ヲ開クベキヤウ、サトサセ給ヒキ。

然ルニ、賊ハ、「我モ主人ノ命ヲカウブリテ、此處ヲ守レル者ニ候ヘバ、タヤスクハ通シ參ラセガタシ。御近臣ノ中、一人ヲトメ給ハルカ。又ハ錦ノ御旗ヲタマハリテ、主人ヘノイヒワケトナサシメ給フカ。此願イツレニテモ、御許シ

アラシニハ、道ヲ開キ參ラセんと答ヘシカバ、宮ハ是非ナク、錦旗ヲ取ラセテ、落ち延ビタマヒヌ。宮ノ近臣ノ中ニ、村上義光ト云ヘル人



アリ。宮ニ從ヒマツリシニ、少シオクレ
タルガ、賊兵等ノ、錦旗ヲニナヒカヘル
ヲ見テ、是ハ汝等賊徒ニタマハルベキ
モノニアラストテ、直ニ進ミテ、賊兵ヲ
打チタフシ、錦旗ヲ奪ヒカヘシテ、宮ノ
御供ニ追ヒツケリ。賊ハ皆其勢ニ恐レテ、
追フモノモナカリケリ。
醍醐。亂。塔。通。錦。願。延。奪。追。

第五課 村上義光 二

其後、宮ハ、吉野山ニタテコモリ給ヒシ
ニ、賊ノ大軍來リ攻メ、其勢盛ニシテ、官
軍ハ、甚危ク見エタリ。

此時、義光ハ、ハゲシク戰ヒテ、敵ノ矢十六
スデヲ、ヨロヒニ折リカケタレドモ、勇
氣タユマス。宮ノ御前ニヒザマツキテ、
賊ノ勢、益盛ニシテ、味方危ク候ヘバ、



臣ハ御召ノ錦ノ直
垂ト、御物ノ具ト
ヲタマハリ、宮ト
申シテ、此處ニト
ママリ、賊ヲ防ギ
候ハン。宮ニハ此
ヒマニ、一方ヲ打
チ破リテ、落ちサ

セ給ヘトテ、御ヨロヒノ上帶 トキ奉リ
ケレバ、宮モ是非ナク思召シテ之ヲ許シ、
涙ナガラニ、落ちサセ給ヘリ。

義光、ヤガテ、ヤクラニ上リ、吾ハ大塔宮ナ
リト、大音ニ呼バ、リ、腹カキ切りテ、討
死セリ。

此時、義光ノ子義隆ハ、共ニ死ナントセシ
ニ、義光之ヲトメテ、宮ノ御ユクヘヲ、

見送り奉ラシム。

宮ニハ、天ノ河マデ落チサセ給ヒケルニ、
賊兵道ヲサヘギリ、危ク見エケレバ、義
隆留リテ、賊ヲフセギ、敵數人ヲ斬リ、身
二十餘ノキズヲカウブリテ、終ニ亦自
殺セリ。

垂。具。防。破。帶。涙。腹。留。斬。餘。殺。

第六課 うつくしき吾子

一、うつくしき吾子や、いづこ。美しきわが
上の子は、弓とりて、君が御前に 勇み立
ちて、別れゆきにけり。

二、美しき吾子や、何處。うつくしき、吾が
中の子は、太刀はきて、君の御元に 勇み
立ちて、別れ行きにけり。

三、うつくしきわが子や、何處。美しき吾が
末の子は、ほことりて、君の御後に 勇

み立ちて、別れ行きにけり。
弓。

第七課 馬

此處に畫けるは、馬のはたらくさまなり。
すきをつけて、田をたがへすもあり。荷を
負ひて、運ぶもあり。又人を乗せて走り、
車を引きて行くもあり。
馬は、此の如く、人の用をなすこと、最多き

獸なり。

馬は、よく馴らす時
は、戰場にのぞみ、
砲烟の中に在りて
も、恐るゝことな
し。
馬は、性質すなほに
して、人に馴れ易



く、よく主人を知るものなり。

昔、一の谷の戦に、平氏の軍大に敗れ、舟に
乗りて落ち行く時、平氏の將平知盛は、
己の乗れる馬を、連れ行かんと なし、
かども、舟せまくして、のすること能は
ざりければ、止むことを得ず、岸に残し
て、去らんとせり。

或人、知盛にすゝめて、「是は良き馬なれば、

此處に放ち置きて、敵に得らるゝは、惜
むべきことなり。殺し給へ」と云へり。

知盛は、「吾が難をまぬかれて、此處までの
がれ來りしは、此馬の功なれば、之を殺
すに忍びず」とて、其まゝにして、舟に乗
りうつりしに、馬は知盛の方を望み、三
たびいなゝきて、別を惜みけりとぞ。

荷。負。馴。性。易。敗。連。良。放。忍。望。

第八課 牛

牛は、馬と同じく、農家に有用なる獸にして、人の力を助くること大なり。其乳は、飲料となし、肉は、食料となして、人のやしなひとなる。皮、角、爪、骨等、皆種々の用あり。斯く、生ける間も、死にて後も、人の用をなすこと、牛の如きは稀なり。

牛は、麥、稻藁等を食ひて、肉類を食ふことなし。牛は、歩行甚遅けれども、忍耐の力強きを以て、重き荷を負ひて、遠きに至ることを得るな



院
初學
六之
十四
學
習
院

り。
古の歌に、「怠らずゆかば、千里のはても見
ん。牛の歩みの、よし遅くとも」と、いへる
ことあり。

乳。飲。骨。斯。稀。麥。稻。藁。遲。耐。

第九課 麥

麥は、米に次ぎて、大切なる穀物にして、大
麥、小麥、はだか麥等の種類あり。



大麥と、はだか麥とは、通常かききて食ひ、

小麥は、
どん、菓子、
ぱん など
につくる。
麥藁は、あみ
て帽子を造

り、或は染めて、種々の玩具を造る。

學習
初學
六之
十四
學
習
院

院
初學
六之卷
麥は、秋に種を下し、翌年の夏に至りて刈り取る。

麥の穂に、鋭き芒を具ふるは、あたかも、やりをかまへて、鳥類の種子をついばむを防ぐに似たり。

麥は、強き植物にして、はげしき寒氣に逢ひても、あほむことなく、霜雪の中に在りて生長す。

穀。菓。帽。染。玩。刈。穂。銳。芒。逢。霜。

第十課 困難ニ勝ツベシ

何事ニテモ、容易ニ成シ得ラル、モノニアラス。必種々ノ困難ヲ凌ギテ、成ルモノナレバ、困難ナリトテ、中途ニテ廢ス可ラス。

困難ナルコトニ出逢ヒテ 恐ル、ハ、卑怯ナリ。勇者ハ、困難ニ勝ツヲ以テ、樂トナ

院
和
學
本
六
之
卷
學
習
院

セリ。

昔ヨリ、大功ヲ立テシ

者ハ、イツレモ、氣力

強ク、常人ノ堪ヘ難

キコトヲモ、堪ヘ忍

ビテ、之ニ勝チタル

ナリ。

サレバ、困難ニ勝ツハ、臥事ヲナシ遂グル基



ナリ。

學問ヲナスニハ、種々ノ困難アレドモ、之

ガ爲ニ屈セズ、勉メテ止マズバ、次第ニ

樂シクナリテ、終ニハ世ニスグレタル人

トナルコトヲ得ベシ。

入勝。容。凌。廢。遂。屈。

第十一課 新井白石ノ話

昔新井白石トイヘル人アリ。九歳ノ時ヨ

院
初學
六之卷
學
習
院
昔リ、日々己ノ學ブ可キ課業ヲ定メ、日中
ニハ、行書ト艸書トヲ三千字習ヒ、夜ニ
入りテ、又一千字ヲ習ヒ、合セテ四千ノ
文字ヲ、讀ミ且書クコトヲ以テ、務トナ
セリ。

冬ノ夜ナドニ、睡氣モヨホシ來リテ、勉強
ヲナスコト能ハザレバ、衣ヲ脱ギテ、ハ
ダカトナリ、井戸端ニ出デ、冷水ヲ浴

ビ、再机ニ向ヘリ。

此ノ如ク、一夜ニ兩

三度モ、水ヲ浴ビ、

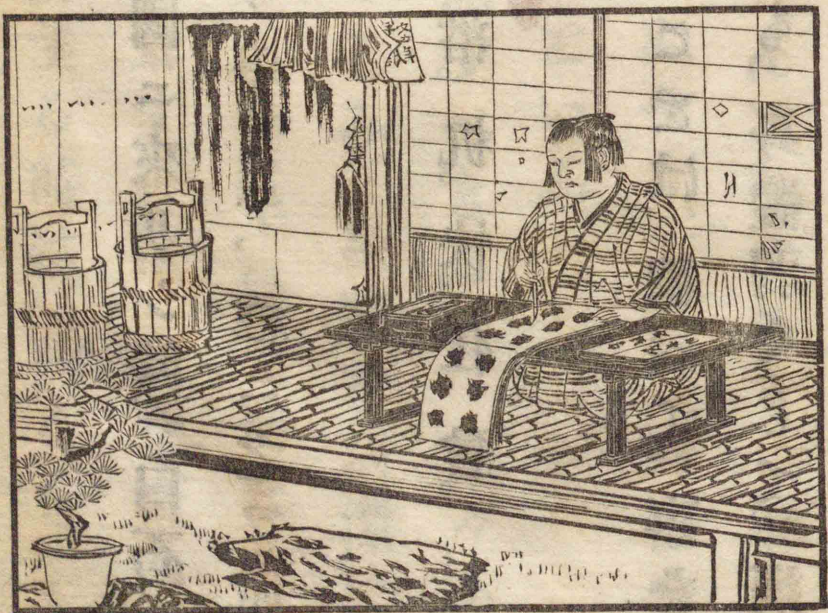
課業ヲ修メテ後、

快ク睡ニ就クヲ常

トセリ。

後、名高キ學者トナ

リテ、徳川氏ニ仕



へ又。

曾テ、朝鮮ノ使者、我國ニ來リシ時、白石
使者ト禮儀ノコトヲ争ヒテ、終ニ之ヲ屈
服セシメタリ。

睡。脱。戸。端。冷。浴。机。快。仕。曾。

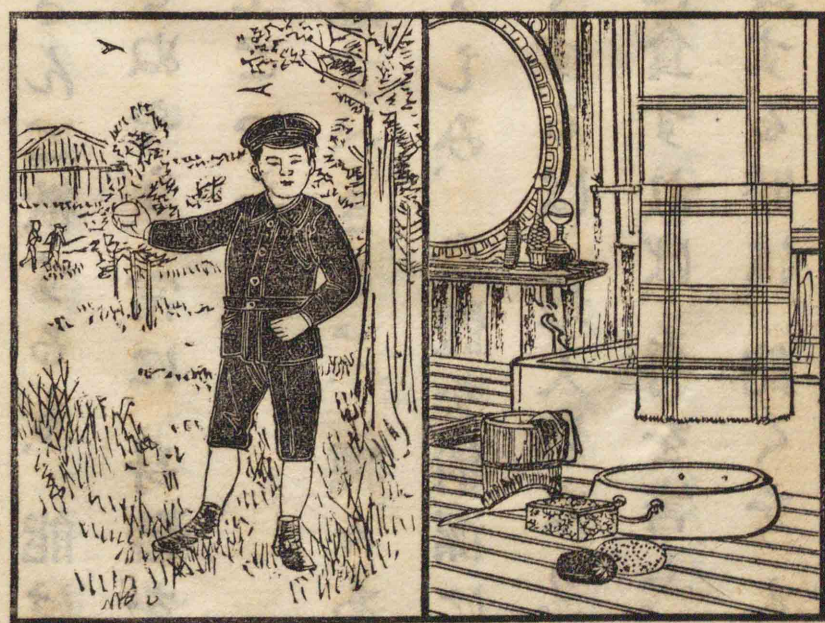
第十二課 養生

勉強して、困難に勝つことは、總べて、事を
成すに大切なれども、身體弱くして、病

あらば、勉強をなさんと欲するも、能は
ざるなり。病を起さぬやう、常に、身體を
大切にすることを、養生といふ。

養生をなすには、注意すべきこと、種々あ
れども、飲食をつゝしみ、身體を清潔に
し、運動をほどよくするは、最大切なり。
りまして、みだりに食すれば、身を害ふ。
故に古の語にも、「食する時は、飽くをも

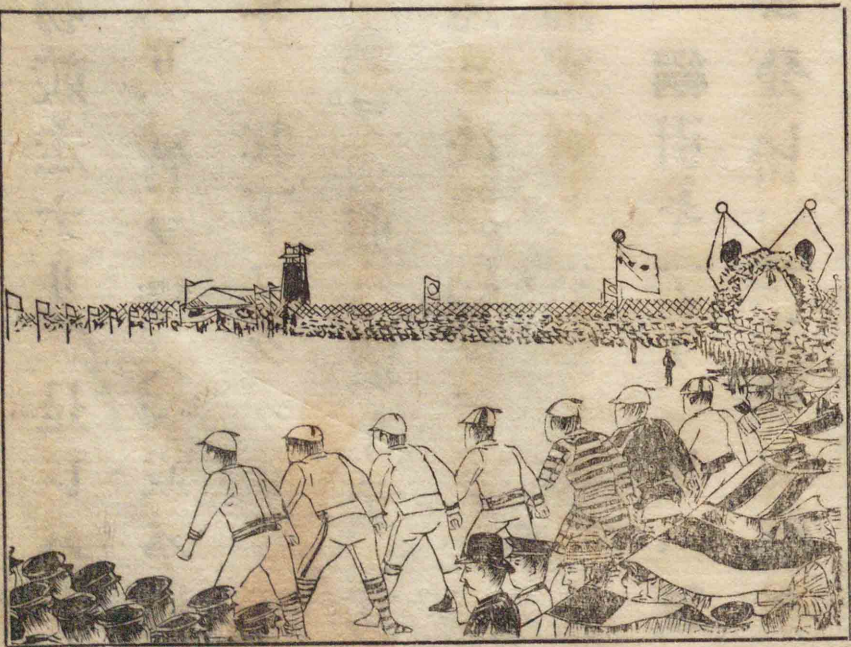
とめずといへり。
身體の不潔は、種々の病を起す基なれば、まばく沐浴し、つとめて、清潔にすべし。
日々、勉強の間には、戸外に出で、運



動し、快く遊ぶべし。寒暑を恐れて、常に、家の中に在る者は、身體次第に衰へて、病を起すに至るべし。
時々、野に出で、散歩し、或は、山に登り、海に遊ぶは、最良き運動なり。
總。病。欲。注。潔。沐。衰。散。
第十三課 運動會
數百ノ學生、廣キ原ニ集マリテ、運動會ヲ

催セリ。小キ旗ノ、多ク並ビテ見ユルハ、旗拾ヲナ
 サントスルナラン。數十人ノ學生ハ、イツレモ身ガマヘシテ、
 アヒヅヲ待チ、他ノ學生等ハ、之ヲナガ
 メ居レリ。誰ガ最早ク旗ヲ 取りテ歸ル
 べきカ。運動ノ仕方ニハ、多クノ種類アリ。二人ノ學

生、互ニ肩ニ手ヲ
 カケテ、トビ行ク
 ハ、二人三脚競走
 ナリ。頭ニ豆ブク
 ロヲ、イタゞキテ
 走ルハ、豆囊競走
 ナリ。其外、一脚競
 走、盲目競走アリ。



院
初學
六之卷
學
習
院

殊ニ面白キハ、障碍物競走ナリ。是レハ走
リ行ク道ニ、綱ヲ張り、竹ヲ横へ、或ハ綱
ヲ地ニヒロゲ置キテ、其下ヲクグリ、又
底ノ無キ大キナル囊ヲ並べ置キテ、其
中ヲクグリヌケ、速ニ決勝點ニ着クヲ、
勝トスルナリ。

大勢ニテナス遊ニハ、綱引キアリ。是ハ數
十人ノ學生、二手ニ分レ、一スヂノ綱ヲ

引キアフナリ。是等ハ、何レモ、勇シキ遊
ナリ。

學校ニテハ、毎日遊戯體操ノ時間アリ。又
時々運動會ヲ催シテ、廣キ場所ニテ、遊
ブコトアリ。

是皆、學生ノ身體ヲスコヤカニシ、且生長
シテ軍隊ニ入りシ時ノ務ニナレシメン
ガ爲ナリ。

學習
初學
六之卷
二十一
學
習
院

院
初學
本
卷
習

會。催。肩。脚。豆。囊。盲。障碍。張。網。

點。戲。

第十四課 親切

親切は、人に盡すべき第一の務なり。
朋友隣人は、云ふまでもなく、外國の人た
りとも、親切に交はる可し。
他人の困難せる時、己の救ひ得らるゝこと
をも顧みざるは、人の道にあらず。

曾て、一人の學生あり。學校の歸り途にて、
泣きながら歩み行く小兒に出逢へり。



此小兒は、身に破
れたる衣服を纏
ひ、足も跣なれ
ば、貧しき家の
ものなるべし。

學生は、近よりて「汝は、如何せしか」と問ひ

しに、「硝子のかげをふみ、四足を痛めたり」と答へぬ。

學生は、之を憐み、我家の前へつれ來り、母に乞ひて、はき物を與へたりとぞ。

隣。顧。泣。纏。跣。硝。痛。憐。

第十五課 童子の身を立てし話

昔、伊豫國に、錢屋半兵衛と云へる人あり。父は、庄屋をも勤めたる程の人なりしが、

不幸にして、身代次第に衰へ、後には、其日の暮にさへ、苦しむ程になれり。

半兵衛は、其頃僅に十歳なりしが、兩親の心配を見かね、如何にもして、其助をなさんと思ひ、或日、父の朋友なる、商人の家に往きて、身の上を頼めり。

商人は、僅に一文の錢を出して、半兵衛に與へ、「之をもとでにして、身を立てられ

よといへり。

半兵衛は、其少きに驚きたれども、父の朋友の與ふるものなれば、禮をのべて歸り、之を用ふる道を、種々に考へしが、

數日にして、良き考を



昔得たり。

先づ、一のさんだわらを買ひ求め、之にて錢さしを造りて賣りしに、八文を得たれば、次には、更に多くのさんだわらを買ひ、前の如く、錢さしを造りしに、此度は、二十文を得たり。

次第に、此の如くになし、一文のもとにて、多くの錢を得たりしかば、前の商人

院
初學
六之卷
學
習

は、半兵衛の志を感じ、己の家に呼びて、
之を使へり。

半兵衛、此處にても、能く勉強しければ、三
年にして、自ら店を出し、終に名高き商
人となりしとぞ。

錢。庄。暮。配。買。求。店。

第十六課 綾部道弘の話

昔、綾部道弘といへる人あり。幼き時は、家

貧しくして、困難

を極めたれども、

學問に志して、ひ

たすら 勉め勵み

けり。

年長ずるに及びては、

學問も進み、醫術

にも達しければ、



學習
初學
六之卷
二十五
學
習

院
初學
六之卷
習

家も次第に、豊になりしかども、常に節
儉を守りて、昔を忘れざりき。

或時、其子に、はでやかなる衣服を贈るも
のありしに、道弘は、之を着ることを許
さずして「吾が幼き頃は、家貧しくして、
父母への孝養も、心に任せざりしに、今
稍 豊になりたりとて、奢る可きに非ず
と云へり。

人は、たとひ富貴の家に生れたりとて、遊
樂に耽りて、ほしいまゝに奢るべきもの
にあらず。道弘の奢を戒めたるは、まこ
とに善き事なり。

綾。弘。勵。達。豊。儉。贈。任。稍。奢。
貴。耽。戒。

第十七課 自立

自立トハ、人ニ依ラスシテ、自事ヲナスヲ

學習 初學 改本 六之卷 二十六 習 記

自云フ。

幼少ノ時ハ、父母兄姊ノ助ヲ受クルコト

勿論ナリト雖モ、自成シ得ルコトハ、ナ

ルベク、人ノ助ヲ借ル可ラス。

朝起キ出ヅル時、自衣服ヲ着ルモ、自立ノ

初ナリ。人ニ伴ハレズシテ、學校ニ通フ

モ、自立ノ初ナリ。

此ノ如ク、スベテ己ノ身ニカ、ル事ハ、自

爲サンコトヲ心掛

ケテ、人ノ助ヲ頼

ム可ラス。

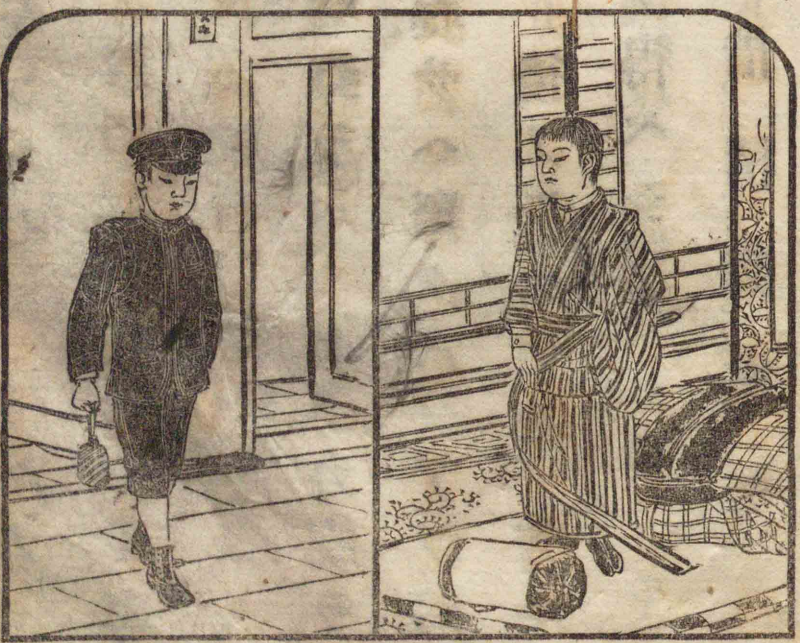
人ニ依リテ、事ヲ爲

スモノハ、何事ヲ

モ、遂グルコト能

ハザルベシ。

人ノ力ヲカラス、自



立シテ事ヲ成シ遂ゲントセバ、種々ノ困
難起ルベケレドモ、其困難ニ屈セザル志
ヲ養ハザルベカラズ。

古ノ人モ、「精神一タビ到ラバ、何事力成ラ
ザラン」トイヘリ。志サヘ堅クバ、アツパ
レナル事業ヲナシ、後ノ世マデモ、芳キ
名ヲ留ムルコトヲ得ベシ。

依。姊。勿論。雖。借。精。到。堅。芳。

第十八課 徳川常陸介

徳川常陸介年十四ノ頃、父家康公ニ從ヒテ、
大坂ノ戦ニ出デタリ。

常陸介、父ニ向ヒテ「此度ノ戦ハ、私ノ初陣
ニ候ヘバ、是非先陣シテ、功名ヲアラハ
シ度候。何卒御聞届ケ給ハレ」トテ、ヒタ
スラ請ヒケレドモ「汝ハイマダ、幼年ノコ
トナレバ、先陣ハ、思ヒ止マルベシ」トテ、

院
初學
六之

許サレザリキ。

然ルニ、ヤガテ大

坂落城シケレバ、

常陸介ハ、イト

口惜シキ事ニ思

ヒ、兩眼ニ涙ヲ

浮ベ「父上ハ、私

ノ願ヲ許シ給ハ



ズシテ、後陣ニ置カレシ故、終ニ今日ノ

戦ニ遇ハズ。誠ニ残念ニテ候「トテ、ナゲ

キケレバ、松平正綱、傍ヨリ「若君、サマデ

嘆キ給フナ。御年モ若キ事ナレバ、此後

ノ戦場ニテ、幾度モ功名ヲ アラハシ給

フベシ「ト、慰メタリ。

常陸介、聲ヲ勵マシテ「余ガ十四歳ノ時ハ、

此後再アルベキカ「ト云ヘリ。

學習
初學
六之
二十九
學
習
完

家康公ハ、此言ヲ聞キ、汝ガ只今ノ一言ハ、
先陣ノ功名ニモ優レリトテ、大ニ褒メラ
レタリトゾ。
眼。浮。遇。誠。傍。嘆。慰。優。

第十九課

事ハ勉強ニ在リ

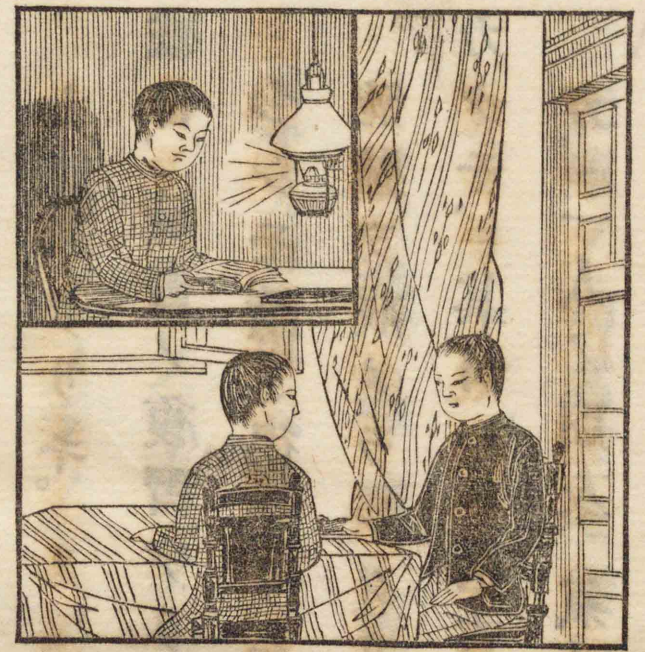
嘗テ、一人ノ小兒アリ。毎日學校ニ通ヘド
モ、遊ブコトノミヲ好ミテ、學問ニ、心ヲ
留ムルコト少ケレバ、教場ニテ、先生ヨ

リ問ハル、コトアルモ、正シク答フルコ
ト能ハザリキ。

或日、讀書ノ復習アリシニ、此小兒ノミハ、
少シモ讀ミ得ザリケレバ、嚴シク、其不
勉強ヲ戒メラレタリ。

カクテ、其日ハ、稽古終リテ、家ニ歸リシ
ガ、一人ノ朋友、氣ノ毒ニ思ヒテ、尋子來
小リ、共ニ勉強センコトヲ勸メタリ。

院
初
本
之
院
習



小兒ハ、本ヲ讀ミ得ザリシコトヲ耻ヂ、且
朋友ノ深切ニ感ジ
ケレバ、喜ビテ、其
勸ニ從ヘリ。
ソレヨリ、日夜怠ラ
ズシテ、學問ヲ勵
ミシカバ、次第ニ
進ミテ、未ダ半年モ經ザルニ、他ノ學生

ニ劣ラザルヤウニナリ、後ニハ級中ニテ
モ、良キ學生ナリトテ、褒メラル、ニ至
レリ。

此小兒ノ、斯ク速ニ學問ノ進ミタルハ、良
キ朋友ノ助ニヨレリトイヘドモ、亦自奮
發シテ、勉強セシニ由ル。サレバ、學問
ヲナス者、初メハ人ニ劣ルコトアリト
モ、勉メハゲミテ怠ラスンバ、終ニハ人

學習
初學教本
六卷
三十一
學習
完

院
初學
六之卷
學
習

ニ優ルニ至ルベシ。
嚴。稽。毒。尋。勸。耻。未。經。奮。

第二十課 犬の話

白と黒との犬あり。白は、善き犬にして、猥
りに人に吠え、或は、かみつきしことな
し。

黒は、之に反して、常に所々を馳せめぐり、
魚をかすめ、鶏を捕りしことあり。され

ば、人皆白を愛し
て、黒を憎めり。
一日、白は、黒と共に
他に行きしに、子
供等は、黒の來れ
るを見て、「此犬は、
度々鶏を捕りし
悪しき犬なり」とて、



學習
初學
六之卷
三十二
學
習
院

院
初學
六之卷
三十三
院

棒にて打ちこらせり。

又、白を見て、「是も悪しき犬なるべし」とて、

同じく打ちければ、白は、驚き逃げて、わ

づかに難をまぬかれたり。

白は、善き犬なれども、悪しき犬と遊びけ

れば、かゝる難に遇ひしなり。人も悪し

き朋友と交はる時は、思ひかけぬ難を、

からぶるに至るべし。

猥。吠。反。馳。

鷄。憎。棒。

第二十一課 一羽の鳥

一、一羽の鳥は、友

待ちつけて、遊

びに往きぬ。友

よく、友よいつ

こ、吾をも誘へ。



初學
六之卷
三十三
院

二、林の鳥も、梢の花に、群れてぞ遊ぶ。友
よく、友よ何處、吾をも誘へ。
誘。梢。群。

第二十二課 義雄友を救ふ

夏の日、義雄は、數人の兒童と、河邊に出で
て、とんぼを捕へ居たり。
兒童等は、東にかけ、西にはせて、多くのと
んぼを獲たれば、各吾家に歸らんとせし

が、「熱さ餘りに烈しければ、河に入りて
游がんとて、皆水に入れり。

されども、義雄は、「幼き者のみにて、河に入
ることは、母上より禁ぜられたれば、今
日は游かずとて、只一人、岸にてながめ
居たり。

他の兒童は、義雄を卑怯なりとて、笑ひな
がら、各樂しげに、遊び戯ぶれ、或は遊び

て、向ふの岸に至る
もあり。或は水をく
りて、底の石を拾
ひ來るもあり。
かくて、久しき間、水中
にて遊びしが、日も
次第に西に傾きて、
やゝ涼しくなりけれ



ば、皆陸に上りて、衣服を着たり。
然るに、一人の兒童は、なほ上り來らざれ
ば、義雄は、之を氣遣ひて、「君も早く上り
たまへ」といへども、兒童は、之を耳にも
留めずして、深みに遊び往けり。
如何にしけん、彼の兒童は、俄にねぼれん
としければ、皆大に驚き、聲をあげて叫
ぶのみにて、如何とも爲すこと能はず。

義雄は、急に衣服を脱ぎ、兒童の傍に遊び
つきて、淺瀬にたすけ來り、終に難無く
岸に上れり。

前に、義雄を卑怯なりと笑ひしものは、之
を見て、如何ばかりか、耻ぢたるならん。

獲。烈。游。禁。傾。涼。遣。俄。叫。急。

淺瀬。

第二十三課

荒木又右衛門

荒木又右衛門ハ、劍術ノ達人ニテ、武勇ノ
聞エ高キ人ナリ。

幼年ノ頃、一人ノ友人ト共ニ、鳥ヲ捕ラン
トテ、山ニ行キ、日暮ニ及ビテ、歸ラント
セシニ、又右衛門ハ、「此邊ハ、淋シケレバ、
不用心ナリ。道ヲ換ヘテユカント云ヘリ。
友人ハ之ヲ聞キテ、「カヤウナル所ヲ通ル
コソ面白ケレ。イザ來タマヘトテ、先ニ

院
初學
六之
習

立チテ進ミケレバ、又右衛門モ、止ムコ
トヲ得ズ、
後ニ從ヒ
行ケリ。

凡二三町モ、
行キタラ



ント思フ頃、又右衛門ハ、岩穴ノ中ニ、山
賊ノ臥シ居タルヲ見ツケ、友人ニ向ヒ「君

若シ此山中ニテ、山賊ニ出遇ヒタラバ、
如何ニセントスルカ」ト問ヘリ。

友人ハ、アザ笑ヒテ、「君ハ、誠ニ心弱キ人ナ
リ。山賊ニ出遇ヒタリトテ、何ノ恐シキ
事カアラシ」トテ、省ミザルモノ、如シ。

又右衛門之ヲ聞キ、「サレバ、彼ノ岩穴ヲ見給
ヘ」ト指サセバ、友人之ヲ見テ、俄ニ色ヲ
失ヒ、聲ヲフルハシテ、再物ヲ言ヒ得ヌ

院完
和學
方之
學
習
院

リ。是ハ大ナル誤ナリ。

吾等ノ身體ハ、父母ノ賜モノナレバ、勉メテ大切ニナスベシ。自求メテ、危キ所ニ臨ミ、之ヲ傷ヒ毀ルコトアル可ラス。吾等ノ身體ハ、吾等ノ爲ノミナラス。君ノ爲ニモ、親ノ爲ニモ、働クベキモノナリ。サレバ、己ガ身ヲ重ンゼザル者ハ、君ニモ忠ナラス。親ニモ孝ナラザル人トイフベ

シ。

吐。溫。誤。傷。毀。働。

第二十五課 龜松の話

吾等は、みだりに危きに近よるべからず。されども、正しき事を行ふ爲には、危しとて、逃げかくる可らず。殊に、君父の難には、身をすて、之に當る可し。信濃國に、龜松といへる兒童あり。或日、父

院完
初學藝林
六之卷
學習院

總右衛門に従ひ、山中の番小屋に行き、
龜松は、外に出で、草を刈り、父は、小屋
の中に在りて、火を焚き居たり。
然るに、何處より來りけん、一頭の狼、ねど
りかゝりて、總右衛門の足にかみつき
ぬ。

總右衛門は、驚きて、とび退きしに、狼は、
あごにかみつきしかば、聲をあげて、龜



松を呼べり。

龜松は、何事ならん
と馳せ歸り、かく
と見るより、直に
手に持てる鎌を以
て、狼に打ちかゝ
りしに、狼は、其刃
をかみ折れり。

院
初學
六之卷
學
習

龜松、少しも屈せず、更に父の鎌を執りて、
終に之を殺し得たり。

總右衛門は、傷を負ひしかども、幸にして、
淺かりければ、日を経て、全くいえぬ。

龜松は、此時、僅に十一歳なりき。後此事
官に聞え、銀若干をたまひて、其孝勇を
賞せられたり。

龜。濃。番。焚。狼。刃。執。銀。干。

第二十六課 黒田長政ノ話

黒田長政十歳ノ頃、父孝高二從ヒテ、賤ガ
岳ノ戰ニ出デタリ。

偶、孝高ノ軍、利ヲ失ヒケレバ、孝高死ヲ決
シ、其臣栗本四郎ヲ召シ、旨ヲ諭シテ、
長政ヲ伴ヒ逃レシム。

四郎ハ、共ニ討死センコトヲ請ヒタレドモ、
許サレザリシカバ、止ムコトヲ得ズシテ、

命ニ從ヘリ。

長政、途ニテ、何處

ニ往クゾト問ヒ

ケレバ、四郎ハ、

泣ク々々實ヲ告

ゲヌ。

長政驚キテ曰ク、父

上、常ニ吾ヲ戒



メテ、武士タルモノハ、進ムコトアリテ、

退クコトナシト曰ヒ給ヘリ。吾今逃レナ

バ、是レ平生ノ教訓ニ背クナリトテ、逃

クルコトヲ肯ハズ。

因テ、再賤ガ岳ニ馳セ歸リシニ、其夜豊臣

秀吉公來リ援ヒテ、大捷ヲ得シカバ、父

孝高モ恙ナカリキ。

賤。岳。偶。栗。旨。諭。曰。肯。援。捷。

恙。

第二十七課 難船を救ひし話

嘗て、讃岐國の沖合を過くる二艘の船あり
 囚き。此日は、一天かきくもりて、墨を流し
 たるが如く、雨烈しく、風さへ吹きそひ
 て、いとすさまじき有様なり。
 されば、彼の船は、荒浪にゆられて、檣も折
 れ、舵もくだけて、甚危く見えたり。

近きあたりの海岸より、此さまを見て、人
 々呼びあへども、折あしく、男子は、家業
 に行きて、婦人小兒のみ残り居ければ、
 役に立つべき者としては、僅に一兩人の水
 手に過ぎざりき。

かく、人を呼び集めんと、あせり居る間に、
 はや、船は破れて、其形も見えずなりた
 り。

院
初學
六之卷

然るに、婦女等は、氣
の毒に思ひ、たとひ、
吾身を失ふとも、
人の死ぬるを見過
ぐすに忍びずとて、
前の水手と共に、
二艘の小船に乗り、
勇をふるひて、漕



き出し、種々の危難を犯して、破船の場
所に至り、難にあひし人々を救ひあげ
たり。
此地の婦女等、かく、己の危きを犯し、人の
難を救ひしは、義を見て勇む心あればな
り。況して、男子たるものは、常に、義に
勇む心を養はざるべからず。
讚岐。沖。墨。流。雨。吹。浪。檣。舵。婦。

學習初學
六之卷
四十四
學習
完

漕。況。

第二十八課 我國を愛すべし

他人の危きを見て、之を救ふは、人の道なり。況して、國の難に遇へば、身を捨て、之を救ふは、國民たるもの、務なり。人のもの、ふの取り傳へたる梓弓

引きては人のかへすものかは、もし、一朝事起りて、外寇のよせ來ること

もあらば、吾等は、此歌の心を以て、國を護るべし。

殊に、我國は、萬世一系の天皇を戴き、世界萬國にたぐひ無き國がらなれば、能く此國を愛せざるべからず。

かく、よき國となりしは、代々の天皇の御威徳と、吾等祖先の忠節とに、よりたるものなれば、吾等も、益忠節を盡して、我

院
祇
學
本
六
之
卷
學
習
院
國の愈盛大に
ならんことを圖らざるべ
からず。

傳。梓。寇。戴。愈。圖。

第二十九課 我大君

一、吾大君の大御影よ、に榮えて、限りも
なし。いぎ幼兒よ、君が御影は天つ空、月
のかつらの隈もなし。仰ぎても見よや大
御影。

二、吾大君の御惠は、そこひも知らず、果も
なし。いぎ幼兒よ、君が惠は、みかのはら、
清き流のいつみ河、いつかは盡きん御惠
は。

影。榮。限。隈。仰。惠。果。

院
初
學
教
本
六
之
卷
終

院學習
初學教本六之卷終

終

全
明治二十七年五月廿七日印刷
年五月三十日發行



編纂者兼
發行者

學
習
院

東京市四谷區尾張町一番地

印刷者

倉部信成

東京市本郷區本郷五丁目十七番地

印刷所

株式會社
秀英舍

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

